

越後妻有アートトリエンナーレにおける 13年間の土壁プロジェクトによる考察

— 生活とアートの融合を考えるきっかけとして —

村 木 薫

1 はじめに

新潟県の里創プランの一環として、越後妻有地域においてアートを核とした地域活性化政策の一つである「越後妻有アートトリエンナーレ」に2000年（第一回）から参加し、松代地域において継続して取り組んできたプロジェクトを紹介することで、現代の生活が失ったものを見出し、次の世代へ何を引き渡せるのか考える機会としたい。

私は彫刻の分野で土壁という素材を扱ってきた。雪深いこの地域の生活を支えてきた太い梁と柱で形作られた在来工法の造形美に敬意を払い、柱や梁はそのまま生かし、痛んだ土壁を大津壁風に現代のデザインを取り入れながら修復すること、作業期間は松代商店街において最低10年続けること、また、参加者は地域の木工、魚沼テクノスクールの生徒たち、商店街の人たちから成るチームとし、できるだけ地元の材料や素材にこだわることを2000年に発表した時のプロジェクトコンセプトとした。それは現在まで続き、2012年度のアートトリエンナーレにおいて合計10棟目となる修復作業を行ってきた。

作品作りの下見のためこの地域に入った時、芸術祭とはいいながらも、ここでは自己主張のみの個人の作品展示をしてもしょうがないと感じた。逆にこの長い時間と人々の労力をかけて築いてきた圧倒的な棚田や里山などが持つ造形美に優れた風景の中に一体化していく作品作りのほうが、この芸術祭の趣旨に沿い、地域に根差した作品になるのではないかと感じた。そして、それは結果的に風景の中に溶け込み、この地域で生きる（に流れる）時間と一体化できる街並み景観として、時間の経過と協働制作の蓄積の中で共有文化財という作品となるはずである。押しつけではなく新しい価値観の共有活動が、この地域を支えてきた知恵と技術を使い、人々との協働制作を継続することで、松代商店街における公共的な価値として機能することを期待したい。

2012年度から村木ゼミの学生たちに参加を呼び掛け、松代保育園の園児たちと松代地域で昔から盛んに育てられている蕎麦の種を育てて、収穫し「そばをみんなで育てよう2012」を開催した。

※「そばをみんなで育てよう2012」ワークショップの記述の一部は大学造形美術教育研究第12号に掲載した。

この芸術祭開催期間中、壁塗りの協働作業と共に、蕎麦を作り、育てる姿を芸術祭鑑賞者に見てもらい、これらの活動の総体として、「手作り感と温かみのある街並み修景プロジェクト」に今後も育ってほしいと願っている。

2 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2012「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」の記録からの考察

2012年3月16日(金)

第5回越後妻有アートトリエンナーレ出品作品について北川フラムさん（大地の芸術祭総合ディレクター）と十日町支所で打ち合わせを行う。今まで淡々と行ってきた土壁プロジェクトについて2012年度の会期中にこのプロジェクトを核としたシンポジウムの開催を打診される。過去4回の芸術祭において継続されてきた「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」について、この機会に様々な分野の人たちと意見交換することは、このプロジェクトの意義をもう一度整理し直し、今後に向けて考察するいい機会になるのではないかと感じた。結果として、開催期間中の9月1日(土)に松代ふるさと会館にてシンポジウムを開催する。

2012年4月6日(金)

2012年に修復を行う「日の出そば（瀬沼 伸彦氏宅）」にて打ち合わせを行う。松代室野地区の大工、コサカイ住建の小堺さんに完成予想図を見せ、見積もりを依頼する。

その後、松代保育園の竹村園長先生と今年から始める「そばをみんなで育てよう2012」プロジェクトについての打ち合わせを行う。蕎麦の種をプランターに植え、それらを修景プロジェクトの一環として、商店街の人たちに育ててもらうこととする。種植えは7月22日観音祭りの後であれば参加者が集まりやすいことなどを考慮し、午後から年長組の園児たちと保護者で50個のプランターを用意し、それぞれのプランターに園児と保護者の名前を書いた手作りのプレートを作ることなどを確認する。



写真1 日の出そば製麺所修景前全景

その後、2000年の第一回大地の芸術祭で最初の土壁プロジェクトの現場となった関谷幸一郎宅に伺い、12年ぶりに奥さんと三女の方からその後の土壁に対する気持ちを伺う機会を作った。そこで、2001年に亡くなった幸一郎さんが、生前散歩の帰りに、小学校の入口から新しく塗り変えられた自宅の正面の土壁をながめていつもにこにこ満足そうに笑っ

ていた姿が印象的であったことや、幸一郎さんが亡くなった直後に三女の方が東京から戻り、生まれ育ったこの家を新建材ではなく、大きな梁と柱と土間のある昔の造りを残してリフォームを行いながら保存している状況などを聞く事が出来た。

また、檜を使った日本家屋として今後大切に使いながら、あと100年残したいと語ってくれた。しかし、ここ数年の中越大震災や長野北部地震などで土壁にひびが生じるなどの被害があった。土壁は、地震に弱いことや豪雪時の対応として、冬場は壁に板のボードを張り保護をしていることなども語ってくれた。地域の人たちが協力して塗った壁を大切に保存してくれていることが実感として伝わった。

2000年の第一回修景プロジェクトでは、関谷幸一郎宅の玄関前のトタンを取り除くところから始まった。魚沼テクノスクールの生徒たちと土壁塗り作業が始まると、地域の人たちがどこからともなく声を掛け合い参加し、協力してくれた。この地域の人たちの中に共同で家を建ててきた記憶が残っていた。実はその記憶を共有できていたことが大切なことである。しかし、現在の都市化された住宅作りは、工場生産された部材を機械的に組み立てるだけのプレカット工法の作り方が主流である。松代地域では、近所の人たちが協力して壁塗り作業などをともにし、上棟式を近所の人たちと祝う行事も同時に行われていたことなど、地域が協力して造る家づくりが最近まで行われていた。「かつては地理的な境界が人間と人間を隔てていたので、村落を中心とした生活共同体がその場の持つ価値観を規定していた。しかし、現代のようにこうした地理的な境界が不明解

になると、それらしき価値観を共有する共同体が存在していないことに気づかされる。いっしょに集まって生活する必然性がない限り、共同体である必然性もないだろう。近くに住む人間たちは、アドホックに集まった、たまたまの集まりに過ぎないのだ。そこにはアイデンティティなど必要ではない。場のあり方が根本的に変化してしまった。こうした新しいタイプの様々な集団、地理上の集団、情報を共有しているネット上の集団などが持っている仮想的な場にとって、いったいどんなものが共有されることになるのか？こうした地理的な制約が吹き飛んだ場所には、ドラムの音は届かない。これが現代のわれわれの環境なのだ。この切り離された、リモートの環境の中での価値観の創出は、どういった方法やどういった熱によって生まれてくるのだろうか。おそらくここに、今後、芸術の意味が非



写真2 関谷幸一郎宅修景前全景



写真3 関谷幸一郎宅修景後全景

常に大きくクローズアップされて来る理由があるだろう。芸術という熱が生まれてくる場所が問題にされることになるだろう。あるいは、場そのものが芸術になると言ってもいいかもしれない。」¹⁾

2000年当時、妻有地域の人たちには何か訳のわからないアートプロジェクトという「もの作り」で不安を与えたにもかかわらず、壁土を塗るという作業は先ほどの記憶もあり、取り組みやすかったのではないだろうか。結果として8人の地域の人たちが参加し、土壁塗りを手伝ってくれた。



写真4 2000年修景作業完成記念

この商店街の関谷松雄さん（若松園スポーツ店経営）はその後このプロジェクトに毎年のように参加してくれた。関谷幸一郎さんは小学校時代の恩師であり、お世話になった先生であったこともあり、土壁塗りの作業の中でこの時が一番楽しかったと語ってくれた。私には、この時に参加した思い出が恩師にお礼を返すという意味にも受け取られ、あたたかい思い出として記憶される出来事であった。また、このアートプロジェクト会場主の関谷幸一郎夫妻は、汗をかきながら会場から会場まで移動するアート観賞者に対して、風の通りぬける土間と檜の梁で支えられた高い天井が作りだすひんやりした空間で冷たい麦茶をもてなしてくれた。記録をみると1万人近くの人たちがもてなされたという。この出来事がその後3年に1回のトリエンナーレ形式で続く大地の芸術祭のその後の方向性を象徴的に示す好例になっていったのではないだろうか。作品鑑賞とはただ単にそこにある作品を見るだけではなく、そこには、関わった人や文化など作品を支える背景と一緒に観賞するという新鮮な喜びやもてなしが生まれていた。そして、都会と田舎をアートがつないでいた。これは、最初から私の意図したことではなかったが、土壁の表面に松代の風を吹かせたいというこだわりの仕上げと連動する動きとなったことはありがたいことであった。都会の美術館にはない非効率的な芸術観賞の方法がここで見直されたように思われる。

4月20日(金)

新潟県魚沼市にある新潟県立魚沼テクノスクールに挨拶に伺う。高野先生と校長先生に改めて松代商店街における土壁による修景プロジェクトの協力依頼を行う。2000年の第一回目からの協働制作であり、この学校の協力がなければこのプロジェクトの意義は半減する。2009年以降の協働作業となる。快く快諾をいただく。しかし、左官科が1年制となったことによる生徒の左官作業能力低下の問題や資金のない中での協力依頼ということでも申し訳なく思っている。しかし、高野先生の配慮により、「郊外学習としての左官実習」という位置づけが学校内において認められ、若い生徒たちの貴重な現場で行う校外実習と

いうことで、ここまで一緒に続けてこられたプロジェクトであることに改めて感謝したい。

また、魚沼テクノスクールの校長先生から、左官の技術は家づくりに欠かせないものであり、古来の日本人が生み出した日本の風土に合った技術でもある。その知恵はまさにアートそのものではないかという心強い言葉もあった。ものを創りだす根底には深い思想と高い技術が兼ねあって、それが芸術という分野にはじめて結び付くのではないだろうか。

5月30日(水)

松代室野地区在住大工である小堺さんの仕事場へ行き、1階部分の施工について、協力をお願いする。その後、2009年から十日町市からの助成金で松代の街並みをデザインしている松代在住の建築デザイナーであるカール・ベンクスさんと会い、今後の松代商店街のまちづくりの方向性について対話する。そこで、2000年から行ってきた私の修景プロジェクトの現状や基本的な考え方を伝える。カール・ベンクスさんは私の行ってきた修景プロジェクトに一定の評価をしているが、建築家として松代を活性化させたいとの思いから、ヨーロッパによく見られるオレンジ色や黄色という若干目立つ色彩を建物に施している。そのため、壁の色は今後作るものに関してオレンジ色や黄色の強く出た色彩はできるだけ押さえ、日本の風土に溶け込みやすい淡いベージュ系の色彩等で統一していただきたいことを伝える。この風景や土地に馴染み、同化することを目的とすることや土を原材料としていることをしっかりと示すこと、また本来の土壁の仕上げは漆喰仕上げで白色になるが、それでは協働の手作り感の感じられる温かみを伝えにくいことなどの理由を伝える。

私の街並み修景のアプローチは、今までの都市計画や建築家が行う街並みづくりとは違い、地域の人たちと協働で1軒、1軒手作りをし、その年の夏の年中行事のような形で協働制作する姿を見せていくことを大切にしたい試みでもある。そこに結果として地域の人たちとの会話が始まり、この地域の伝統や文化をどうやって支え、伝えていくかという問題意識の喚起、そして会話を重ねることなどが自然と行われてきた。

最近、この積み重ねの会話による気づき=セルフエデュケーションがプロジェクトのもう一つの意義ではないかと思えている。「そこへ参加するものが熱を持ち寄り、それが発火点にまで達したときに、そこにはじめて新しい価値観が生まれ、それが人間同士の関係を引き留め、その集まりにとって必要不可欠のアイデンティティが生まれるのである。そうなった時に、芸術はその場における価値観の創出装置となるのである。」¹⁾とあるように、土壁による修景プロジェクトの役割は、複数の他者と価値観を共有する体験の場を作ることであり、作り手と地域の人たちをつなぐ装置として機能させること、また、できればこの活動を観賞する外部の人たちとも価値観の共有関係を作ることであると考えたい。

今年から松代保育園の子どもたちと、この地域で盛んに作られている蕎麦を実際に種から植えることや、商店街の人たちからは育てることを協力してもらい、収穫後、参加した

商店街の人たちや保育園の保護者や子どもたちと蕎麦を打ち、会食することを企画している。セルフエデュケーションは幼児と保護者と地域が一体となって将来の価値観を生み出し、共有する試みであると考えている。そして、その根底には愛着というキーワードがあるように思われる。アートという活動は、経済効率では推し量れない手間がかかることで意味のある行為になっているのではないだろうか。また、そこに関わる人たちがその手間を惜しまず、楽しみながら育てていくという関係を作ることによって成立するものである。

その後の展開として、蕎麦という食材を使った保存の効くクッキーを作ってみるなど、土壁プロジェクトを象徴する食材の開発も進めたいと思っている。その背景には、単なる土壁の塗り替えという作業ではなく、この地域の人と人とのつながりを意識した組織作りが必要に思われてきたことに起因している。地域の人や食材との協働作業がこの修景プロジェクトに欠かせないものではないかと感じている。また、新潟中央短期大学で学ぶ保育系の学生たちが、地域の人たちや食材をテーマに協働制作のスタッフとして参加し、食育という観点から学ぶ場として活用してほしいという思いが強くあった。

6月8日(金) 午後7時より

「松代フィールドミュージアム事業完了報告及び大地の芸術祭会議」に出席

ここでNPO法人越後妻有里山協働機構代表の関口さんの発言の中で、町民と膝つき合わせながらやってこなかったという言葉があった。また、住民の視点と外部の視点の両方でまちづくりを行って行く中で、松代商工会と方向性を共有出来なかったという反省の言葉もあった。この二つの指摘は松代という過疎化の進む地域で、地に足をつけた活動を今後も継続する必要性を強く感じさせるものであった。

都市の論理や価値観、生き方などをそのままこの中山間地域の生活の中に押し付けることは無理な話ではあるが、それでも少しずつ、田舎の生活経験がない都会の若者たちがこの地域に入り込み、試行錯誤しながら記号化されない実際のものづくり体験を通して地域再生を核としたまちづくりを始めようとしている。まちづくりという言葉自体、地域社会やコミュニティの崩壊とともに新しく生まれた言葉である。また、地域に入って、地道な働きを行っている都会から来た若者たちに地域の人たちや各集落の人たちも応援する姿勢が芽生えてきており、その両者をつなぎとめる関係づくりにアートプロジェクト活動が効果的であると認識している。「アートプロジェクトのプロジェクトとしての特性は、大まかに二つのグループに分けることができるだろう。一つは「脱＝作品化」という側面。これは、完結し特権的な財として位置づけられた「芸術作品」を、作家自身が放棄し、表現の提示および制作のプロセスにある種の集団的な表象（＝代理）として利用しようとする企てである。もう一つは、コミュニティやローカリティあるいはマイノリティという社会的な文脈に介入することによってのみ可能な表現プロセスの活動そのものを本質的な作品

形態として提示する企てである。』¹⁾

一方、現代の都会では居場所を探さなければいけない状況が経済の停滞感と共に存在し、この空虚感を受け止めてくれる田舎の風土や生き方など特に若者の間で見直されてきていると思われる。今後のライフスタイルとして、都会と田舎を行き来する活動（与えて与えられる関係）が必然的に広がるように感じている。それも13年間継続してきた土壁プロジェクトから見えてくる現象であり、地域再生に向けた出発となることを期待したい。

また、この場で2012年の松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクトの予定及び説明を行う。その席で先日伺った関谷幸一郎宅で三女の方から聞いた話を紹介し、2000年から実践してきた土壁による修景プロジェクトの意義、反省、総括的な内容で話し合う必要性を感じている事を伝えた。

6月10日(日)

魚沼テクノスクール左官科の種村先生と現地にて打ち合わせを行う。

その結果、初日のセメントモルタル塗りは初心者がほとんどということで、当初のラス金網張りでは第1層目のモルタルの擦りつけができない可能性があるため、ラスカット板を大工工事の段階で貼ってもらうように指示を変更した。

また、松代で2002年からお世話になってきた富澤恵子先生（松代在住：小学校校長を経て現在、津南町教育委員会指導主事）とシンポジウムについて打ち合わせを行う。そこでカール・ベンクスさんと十日町市の計画について、修景プロジェクトと相反する発想ではなく、両方の少しの違いがかえってまちの活性化につながるという話を伺った。

また、2003年に修復させていただいた本山さんのお宅に伺い、現在このプロジェクトに関してどのような感想を持っているかお聞きしたところ、「楽しい思い出です。ただ、その年、室内にも作品があるかのようにお客さんが間違っ入って来て戸惑った」というちょっと困ったエピソードなどもお聞きした。

その後何度かの地震に対して、本山さん自身でひび割れた部分を補修修理し、大切に管理している様子がうかがえた。この協働制作による壁塗りに対して否定的な意見は全くなく、好意的にその後のメンテナンスの面倒くささもすべて引き受け、なお且つ両側面の壁もこのベージュ系の壁に変えてしまったことなどの事例を聞くと、このプロジェクトに共感し、協力していただいていることが実感として伝わってくる。



写真5 2003年修景完成記念（本山ご夫妻宅）

6月29日(金)

午前11時に、日の出そばにて打ち合わせ。また、試作した「そばの実クッキー」を食べる。瀬沼さんより蕎麦の風味がないとの指摘をうける。修復現場で大工の小堺さんと打ち合わせ。最初3階部のR部に合わせて、1階部にもRのデザインを考えたが、将来3階部のRはなくす方向で考えるということで、今回修復する1階部の塗り壁はベージュ系の漆喰をフラットな状態で塗り、古材を正面に飾り付け真壁に合わせて、落ち着いたデザインで統一した修復工事を進めていくこととした。

その後、松代保育園に伺い、竹村園長先生と7月22日(日)の蕎麦の種植えについて、できれば松代の土も混ぜて使用したいという提案を行った。そして、来週中に近くの山の土を採取に行くこととした。(越後妻有里山協働機構の高橋寛さんに依頼する。)

そして、富澤先生のお宅に伺い「そばの実クッキー」のレシピや誰に作ってもらうのか、できれば地域の方々の協力があることが望ましいことや、もてなしの場ということで2002年に修復した「茶もっこ処・おらこ」の使用が可能であること、また9月1日(土)に開催するシンポジウム内容のポイントなどの確認を行なった。

7月7日(土)

下地のセメントモルタルを第2層目として塗る作業日である。しかし、雨が時々激しく降るあいにくの天候となった。8時には魚沼テクノスクール左官科の種村先生をはじめ2人の生徒が現地で作業を開始した。11時頃メディアーター講座受講生の9人が関東方面から体験学習の一環として塗り壁ワークショップに加わった。最初「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」の概要を説明し、様々な意見交換も交えながら午後から実際に塗ってもらった。初めての経験としていかに垂直に壁を塗ることが大変か理解していただいたように思う。魚沼テクノスクールの生徒の手先の作業に感心しながらの作業ではあったが、最初の戸惑いから次第に楽しそうな雰囲気作業中に感じられるようになった頃に雨が激しくなった。ブルーシートを屋根代わりに覆いながら、水が上から伝わらないようにする作業を並行して行った。3時の休憩後、雨中の作業のため疲労が出てきたので、急きょ富澤先生のお宅に伺い、日本の各地域で行われる芸術祭全



写真6 日の出そば修景塗り壁作業風景



写真7 日の出そば修景塗り壁作業風景

般についての意見交換会に変更した。そこで解散し5時に現場に戻り掃除をする。

7月11日(水)

日の出そばにて仕上げの漆喰壁を塗る。魚沼テクノスクールの生徒4人と校長先生とで現場に向かう。種村先生が8時から作業を進めていた。素人が塗ったため、中塗りの凹凸が激しく、予想の仕上げ壁の分量で足りるかどうか不安となる。校長先生と1時間ほど今まで修景してきた商店街の現場を回り、アートについて、教育について、このプロジェクトの今日的意義について意見交換を行う。



写真8 日の出そば修景作業完成

左官作業としては、最後の仕上げ作業となるので、養生テープの貼り具合や汚れのふき取りなどに神経を使う。高野先生が後から合流し作業に加わる。午後3時に記念写真を撮り、生徒たちが学校に帰り、最後の側面の仕上げ塗りを種村先生と今井君で行う。

7月22日(日)

村木ゼミの学生(森さん・須貝さん・田畑さん・平澤君の計4人)と一緒に蕎麦の植え付けワークショップを行うため、松代保育園に10時ころ到着する。時折降る雨のため屋外での種まき作業はできず、向かいの建物のビロティーと保育園玄関前の2か所で行うこととした。松代の土と田んぼの土と培養土などを混ぜて今回の蕎麦の植え付けプロジェクト用の土を作る。



写真9 保育園での蕎麦の植え付け作業

年長クラス園児23名+保護者23名の合計46プランターを用意する。一家族2個のプランターの中に蕎麦の種をばらまき、上から土をかける作業を行う。牛乳パックを使ってそれぞれのプランターに差す名札カードを作っておいてもらったことは当日の作業時間の中に組み込むには厳しかったのでありがたいことであった。

ワークショップの最後に学生たちと水をかけ、芽が出て育つことを祈る。当日は松代の観音祭りのた



写真10 蕎麦の植え付け参加者集合写真

め、学生たちと商店街に出かけ、祭りの雰囲気を楽しむ。仲良く語り合っている雰囲気があり、人と人との繋がりを感じた。しかし、若者が少なくやや寂しい感じがした。2000年から通ってきている地域であり、関わった人たちから声をかけられる機会が増えたことは嬉しいことである。(カール・ベックスさん、齋藤支所長、中村区長、小野島建設の会長さん、旭堂旅館のご主人、旧松栄館の主人と弟さんなど) ここでカール・ベックスさんの事務所で日の出そばを味わう。次回のワークショップは8月8日(水)に決定し、新潟中央短期大学の学生と保護者の人たちと協力して、商店街の様々な玄関先に挨拶しながらポットを置かせてもらうという作業となる予定である。

8月8日(水)

村木ゼミの学生(成田さん・吉村さん・渡邊さんの計3人)と12時に「日の出そば」に伺い、蕎麦をいただく。種の皮の混じった黒っぽい蕎麦粉と白く精製された普通の蕎麦粉をいただく。午後より富澤宅にてクッキー作りを松代高校の生徒と一緒にやる。そこで、精製された蕎麦粉(白)か、蕎麦の実の皮が混じった蕎麦粉(黒)のどちらも試してみる。また、菜種油かバターで溶いてみる。それぞれ計4種類のクッキー試作及び、そこに載せる蕎麦米については炒るのか、茹でるのかでそれぞれ2種類のやり方で試作を行う。瀬沼さん、高橋さんに食べてもらい、結果として、蕎麦の殻の付いたそば粉を使用し、菜種油で溶いたほうが素朴な味わいとなることや、そば米は茹でたものを上からまぶしたクッキーが蕎麦の風味やサクサク感がよく伝わるものであることがわかった。午後4時より松代保育園より蕎麦の種が植えられ芽が出た(10~15cmくらいの高さに育った)50個のプランターを、越後妻有里山協働機構の高橋さん、瀬沼さん、保育士さん、ゼミの学生たち、参加してくれた園児と保護者の方々が、それぞれ植えたプランター2個を1セットにして、商店街沿いのお宅や店舗の玄関先(合計13戸)のご主人に声をかけ、玄関前に置かせていただいた。そして、蕎麦の花が咲き、実がつくまで水やりなどの生育管



写真11 松代高校の生徒とクッキー作り



写真12 商店街に蕎麦の生育管理を依頼する



写真13 関谷幸一郎宅前に並ぶ蕎麦のプランター

理をお願いして回った。関谷幸一郎宅では4個のプランターを預かっていただく。

このプロジェクトでの活動内容を考えると、地域の大工さんや魚沼テクノスクールとの協働作業で壁の改修工事を行い、保育園児を中心とした地域の人々と蕎麦の種植えから収穫・会食までを企画実践することなど、すべてを一つのプロジェクトとしてつなげて考えたい。2012年の活動からはこのような広がりのある活動に必然的に育っていったように思われる。少しずつ人と人をつなぐコミュニケーションがこのプロジェクトの主体となっていたことは他のサイトスペシフィック（その場所においてのみ成立する）型のアートプロジェクトを見ても同様の傾向にあることを感じている。この評価はまだ測れないが、時代の変遷とともにどのように評価されることであろうか。しかし、アートには人と人をつなぐ可能性があることは確かである。面倒くさいことはだれもがやりたくないことではあるが、その邪魔をする気持ちを解きほぐす力や何か楽しいことが起こりそうだという期待感を感じさせる力などが膠着した人間関係の潤滑剤となっていることを感じる。

8月31日(金)

シンポジウム当日のまち歩きについて地元の人で町の成り立ちや松代の歴史に詳しい人を捜すため、若松園の関谷松雄さんのところに伺う。そこで郷土史家の鈴木益蔵さんを紹介していただく。そして自宅に伺い、明日のシンポジウムのまち歩きのガイドをお願いする。しかし、93歳という高齢のため、地域の交流スペースである「茶もっこ処・おらこ」で待機していただき、そこで松代町の由来や商店街を襲った大正時代の大火後に道が拡がり現在の町割りになった説明をお願いすることとした。その後、鈴木さんからまちあるきのガイドとして高橋嵩一（松代在住 郷土史家）さんと関谷正義（松代在住）さんを紹介していただく。しかし、当日は町内の道普請のためほとんどの人たちが午後から参加できないとのことでなんとかやりくりしていただき、午後3時からのまち歩きにガイドとしてお願いした。その後、午後12時30分に鳥取大学の小泉先生と越後妻有里山協働機構の高橋さんと明日の打ち合わせを行う。その後、高橋嵩一さんのお宅に伺い、明日のまち歩きの順路や商店街だけではなく古くからある商店街裏側にある生活感の漂う小路を歩く中で、生活景が懐かしさを感じさせてくれる松代の生活空間を歩くことにする。また、戦国時代の上杉軍が通った



写真14 「おらこ」前に並ぶ蕎麦のプランター



写真15 郷土史家の話を街歩き参加者で聞く

という古道も一部歩くこととしたい。また、瀬沼さんと富澤先生に冷たいそば茶の手配、鈴木益夫さんや越後妻有里山協働機構代表の若井さんには当日のシンポジウムへの出席をお願いする。前日にやっとまち歩きの旅の行程やガイドの手配ができるというぎりぎりの日程であったが、安堵感を感じることができた。

9月1日(土)

午前中 高橋嵩一さんのお宅でまち歩きの出発点の打ち合わせを行う。国道を歩くよりも、昔の生活感の残る裏道を歩いてみると、以外にここにしかない懐かしい風景を発見し、地形に沿った集落の成り立ちが感じられた。そこで急遽、古道と裏道と現在の商店街を合わせた形でコースを設定する。

午後1時から松代ふるさと会館で後藤先生、富澤先生、小泉先生たちと時間や大まかな流れの打ち合わせを行う。また、進行の流れや司会を小泉先生にお願いする。午後3時より松代駅前に松代まち歩きのために集合する。総勢20名くらいの人たちが集まる。(鳥取大学の学生や長岡市都市開発課の職員など)松代駅から出発し、国道から松代の集落につながる細い道を登り、商店街とはちがう生活実感の残



写真16 修景後の日の出そば全景

る風景を見ながら、商店街に抜ける。そこで土壁による修景プロジェクトで修復された家並みやカール・ベックスさんの立て直した建物を紹介しながら、日の出そばに寄り今回のプロジェクトの概要を説明する。その後、宿場町としての発展や、古道として残っている古い街道の道しるべやその場所の由来を聞き、また実際に見ながら、「おらこ」に立ち寄り鈴木益蔵さんから商店街の成り立ちの話を聞く。その後松代の集落から松代駅に向かって降りる道順となり、集落が河岸段丘の上に作られていることを知る興味深い内容となった。その後松代ふるさと会館に戻り、シンポジウムに移る。シンポジウムの内容に関しては別の項目で紹介したい。

9月8日(土)

村木ゼミの学生(田端さん、須貝さん、吉村さん)と「森と木の詩の美術館」へ行き、日大芸術学部の倉掛先生たちのグループ展を見てから、午後、富澤先生宅でもてなし用のつちかベクッキー(仮称)を作る。先日試作した結果、黒の粉(蕎麦の種の皮が多めについて挽いたもの)と白い粉(蕎麦の種の



写真17 つちかベクッキーの試作風景

皮をすべて取り除いて挽いたもの)を1:2位の割合で混ぜて土壁の色に似せたクッキーを量産することとした。デザイナーの山岸さんからデザインしてもらったできたばかりのラベルを2個組クッキーのパッケージに巻き、それぞれのセットにチラシを付ける。



写真18 パッケージされたつちかベククッキー

10月12日(金)

越後妻有里山協働機構の高橋さんと今後の打ち合わせを行い、まち歩きや蕎麦の種を植えることなどのイベントは来年も継続し、2015年に向けた計画を打ち合わせる。高橋嵩一さんと打ち合わせた後、関谷幸一郎さん宅へ伺い、蕎麦を育てていただいたことへの感謝と11月11日の蕎麦打ち体験の招待を告げる。瀬沼さんに「そばをみんなで育てよう2012」の蕎麦打ち会場として活性化センターの予約をお願いする。

10月19日(金)

午後1時より、松代保育園へ伺い、保護者の方々、越後妻有里山協働機構の高橋さん、瀬沼さんたちから協力していただき、お礼のあいさつも兼ねて、商店街のプランターを回収する。途中、種がこぼれたりする中、竹村園長先生と種を拾いながら、50個のプランターを保育園に運ぶ。柳さんたち(松代在住保護者)から蕎麦の実をふるってきれいに選別してもらう。60歳代の方々が協力的であり、その後のまち歩きに参加してもらう。この地域では働き手の中心世代でもあり様々な生活の知恵を持っている世代でもある。その後、ガイドとして松山欽一さん(松代在住)にお願いし、古道や熊越山の由来、松代の交通事情などの説明を聞きながら、1時間30分ほど歩く。その間、松代保育園の竹村園長先生から普段子どもたちが歩いている道であることや保育士にこの道の由来を伝え、子どもたちにも聞かせたいという意見をいただく。



写真19 松代保育園での蕎麦の実回収作業

修景プロジェクトを継続する中で、在来工法を中心とする日本の伝統的な工法が、かつての宿場町と



写真20 松代古道のまちあるき風景

して栄えた松代の風景として適していると感じてきた。また、それがこの地域らしい魅力になると思われる。そして、そこに共感できる人たちとの協働制作でこの地域の誇り、伝統を呼び覚ますことがプロジェクトのテーマであると考えている。そこで郷土史家の人たちや松代の商店街の人たちと関わる中で、現代という時間が無くしてきたものがかつての日本の文明の中になかったのかということが気になってきた。

「日本について「子どもの楽園」という表現を最初に用いたのはオールコックである。中略 モースは言う。「私は日本が子供の天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子供が親切に取り扱われ、そして、子供のために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子供たちは朝から晩まで幸福であるらしい」。²⁾ というような文章が幕末から明治時代にかけて、日本を訪れた欧米人観察者の手記に多数みられるという事実がある。

いくつかの記録を紹介したい。「幕末から明治二十年代にかけて、日本の子どもの大人並みの自己保持能力はこのように欧米人観察者をおどろかしたのだが、彼らのおどろきはルソー以来の「子どもの発見」、すなわち純真な子どもらしさという近代的強迫観念にもとづいていた。日本の古き文明には、童心とか無邪気な子どもらしさといった観念は存在しなかった。誰しも認めたように、日本の子どもは無邪気で愛らしい、子どもらしい子どもだった。オールコックのいう通り、大人ぶった気どりは彼らの知らぬ感情だった。しかしそのことは、いったん必要あれば、大人顔負けの威厳と落ち着きを示すことを何ら妨げなかったのである。なんとなれば彼らは、不断に大人に立ち交って、大人たちの振舞から、こういうときはこうするのだと学んでいたからである。』²⁾

今回のプロジェクトでは幼児と地域の大人との協働作業を単なるイベントではない形で継続したいと思っている。日本の古き文明の一側面には、地域と親子のつながりの中でいつも誰かが子育てを担い、現代のような孤立する子育てという状況を周りの大人がどこかで補いあう関係づくりが当たり前のようであった。「かつてこの国の子どもが、このようなかわいさで輝いていたというのは、なにか今日の私たちの胸を熱くさせる事実だ。」²⁾ という記述があるようにこの国の文明がどのような生き方を後押しし、そこにどのような知恵と工夫を行っていたのか、そして今後それらをヒントに子育ての環境を考えたいと思った。

10月26日(金)

3時半ころ、松代保育園に行き、フェンスにはさ掛けした蕎麦の実の乾燥状態を観る。保育園の園児たちに刈り取りをお願いする。そして、乾いた状態



写真21 松代保育園での蕎麦のはさ架け風景

で瀬沼さんに渡すこととする。その後、松代保育園で刈り取りを行うが、蕎麦の実と一緒にたくさんの細かい葉っぱなどが混ざっており、越後妻有里山協働機構の高橋さんからきれいに種だけにしてもらい、日の出そば製麺所の瀬沼さんに届けてもらう。

11月11日(日)

午前10時より松代活性化センターにおいて蕎麦打ち体験を行う。新潟中央短期大学村木ゼミから吉村さん・森さんの2名の学生がそば打ちスタッフとして同行する。瀬沼さん（製麺所経営）より先日収穫した蕎麦の種をそば粉として挽いてもらい、そこに小麦粉を混ぜた材料、海藻のり、ローラー棒、だし汁などを用意してもらう。松代保育園の園児たちと保育士さん、そして高橋嵩一さん、富澤先生、商店街の高橋お茶屋さん（以上、松代在住・プロジェクト参加者）、長岡造形大学の後藤先生夫妻など総勢25名くらいの人たちが集まってくれた。最初、瀬沼さんから海藻のりと蕎麦粉を混ぜてもらい、ボールの中で子どもたちも参加して練る作業を行う。それをローラーで薄く伸ばし、折りたたみ、包丁で細く切る。それを鍋でゆでてみんなでいただく。しかし、慣れない作業のため、全体が太く仕上がってしまい、食感が大雑把な感じがしたが、子どもたちは、しっかりと手を合わせて感謝の気持ちで食べることができた。自分たちで捏ねて切って茹でたという体験からか、とても充実した表情を見せ、おいしそうに食べていた姿が印象的であった。

蕎麦の種を保育園児が植えるところからはじまり、地域の人たちから育ててもらう。その蕎麦の種を育ててくれた商店街に住む人たちは、将来の可能性（蕎麦という食材にすることや子どもたちの夢をかなえてやること）に対して無償の手間や時間をかけてくれた。このワークショップではどちらが欠けても成り立たず、そのインタラクティブな関係をあえて作り出すことがこのプロジェクトの大きな意図でもある。「ワークショップの手法は、活動に誘い込み、自主的な活動と呼び覚まし、そして、活動を見守って支え、いつでも応答できるスタンスを



写真22 蕎麦を捏ねて伸ばす作業



写真23 蕎麦を包丁で切る作業



写真24 蕎麦の会食風景

もって、活動に与ることだと捉えることができる。ワークショップは、ある価値観を授けるのではなく、それぞれが自身の価値観やイメージを育てていけるように、まずはメディアを整え、人と人との関係性を学ぶ環境を準備することからはじまるのである。』³⁾ という言葉からもうかがえるようにインタラクティブな体験をすることで、新しい価値観を共有するワークショップという手法はこのプロジェクトを継続するうえで欠かせないものである。しかし、まだ自主的な活動を呼び覚ますところまでは至らず、これからも継続していくことが大切であると考えている。近くに住む者同士が、挨拶を交わし、気配を感じて、お互いに助け合うという関係は、かつての日本の文明の中に当たり前のこととしてあったように、現代においても無くしてはいけない「人としてのルール」であると思われる。この4ヶ月間におよぶワークショップは最後にその果実を食材としていただき、みんなの協働作業でやり終えた。

参加した学生の感想

- 「そばをみんなで育てよう2012」に参加していた松代保育園の子ども達の姿から学んだことはおいしくて、楽しい食事をするためには、育てて、調理をして、食べることが大切だということである。子どもたちにとって、土作り、種植えから始まり、水やりや収穫そして蕎麦打ちまですべて自分が関わっている蕎麦を食べて、とても美味しそうに食べている姿が見られた。ある子どもは休むことなく蕎麦を食べ続けていた。やはり、作る段階に関わったことで食欲や食べたいという思いを膨らませていたのだと思う。また、家族や友達と共に調理をしたということも大きいと思う。同じ作業をしている友達に「(こねている物が) もっと柔らかくなるまで頑張ろう。」などと言葉をかけた合っていた。やはり、自分が作ったものは特別おいしいと誰もが思う。そのような体験から、子ども達はいろいろな事を学んでいるのだと思う。

平成24年度新潟中央短期大学卒業論文 「自然を通して季節の野菜に触れ食育を学ぶ 吉村悠理著」より抜粋

- 松代保育園の子ども達は、一つの実から多くの実を収穫することで食べ物には生命があることを感じる「食べ物の命を感じる力」、収穫した実を挽いて蕎麦粉にし、その蕎麦粉を使用して調理する「料理する力」、食材が自分の体にとってどのような役割をもっているかに気づき判断する「食べ物を選ぶ力」、食材そのものの味や美味しさがわかる「食べ物の味がわかる力」、自分たちで育てて調理した物をいただき、体をコントロールする「元気な体のわかる力」、それぞれの五つの力を多少ではあるが感じる事ができたと思う。親子で蕎麦の実を植えている様子や子ども達と一緒に調理したり、一緒に調理した蕎麦を食べている様子を見たりして、五つの力はこのような活動を通して育って

いくものだと思った。「食育」とは、食べ物を食べて育つものだと考えていたが、蕎麦の食育を通して、育てたものを食べて育っていく（成長していく）ことを学び、循環していると感じた。

平成24年度新潟中央短期大学卒業論文 「森のさんぽを通して食育を学ぶ 森貴絵著」より抜粋

11月24日(土)

午後1時に瀬沼さんの製麺工場に伺う。そこで越後妻有里山協働機構の高橋さんと来年以降の「そばをみんなで育てよう」プロジェクトの打ち合わせを行う。幼い時に会った料理の味（おいしいという経験）は一生忘れないものである。種から食材と関わるこのような経験を重ねることで生涯を貫く食育となることを期待したい。また、今回の反省から、蕎麦の収穫量を増やすことやまとまった畑で育てる姿を見せていくことなどを配慮して、商工会議所の斜め向かいの草地を松代保育園児が種をまく場所として確保していくこととする。（毎年花を育てる場所の一部を借りることで可能ではないかという結論になる。）その後、今回協力してもらった人たち一軒一軒に先日の蕎麦打ち体験の報告書と一緒に「つちかベクッキー」（仮称）を感謝の気持ちとして配る。短い交流の中で、今回のプロジェクトに関してさまざまな知恵が出てくることの心地よさを味わっている。その背景として、13年間付き合ってきた人たちとの関係が少しずつ同じ方向に向かって収束したり拡散したりしながら育っていることが実感として感じられることがあげられる。夕方、松代郷土資料館長になった森繁哉氏の舞踏公演を郷土資料館内の舞台上で拝見する。家の建前における儀式や、里山に住む動物になって踊る部分など人と動物が交互に重なりながら交感している様子、また土俗的な要素などが色濃く出た作品であり、日本の風土から出てくる表現の確かさ、信頼感などを感じる。私も街並みの手直しだけではなく伝統的な雰囲気意識した街並みを協働で作ることの意味（人の心に訴える要素を醸成しつつ）を深めながら、かつての日本の文明にあった人と自然の良好な関係を美術として表現しつつ、街並を修景していきたいと思った。

3 まとめ

本論は、2012年の第5回越後妻有アートトリエンナーレ「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」の3月から11月までの9カ月間の活動記録をもとに考察を加えたものである。「芸術は特権的な芸術家のものであるというのではなく、全ての人の労働の中で芽生え、労働そのものが芸術作品への起点となる。もしそのような拡張されたアートがある種の社会性と公共性をもつのであれば、間違いなく生活と労働との間にある差異

は消滅する。」¹⁾とあるように、このプロジェクトには生活空間とアートの融合を図ることが最初の目的としてあり、上記の内容を目指す試みでもある。

生活を見つめるひとつの手段として、生活の風景があげられる。この場所に最初に立った時、ここの風土、歴史などが形作ってきた空気感が気になった。戦後、日本人は、経済効率中心の大量生産・大量消費型のモノづくりが主流となり、住まう家でさえも使い捨てのように映る風景がここでは似つかわしくないと感じたことが今回のプロジェクトの出発点である。また、先祖代々受け継ぎ耕してきた場所はその住まい方にどこか力を持っているということが感じられる風景でもあった。1年に一回、修復作業で地域の人たちと共に労働で汗を流すことにどこか心地よさを感じてきたことも事実であり、日本の原風景ともいえる里山を背景としていることもこのプロジェクトを強く後押ししてくれた要因でもある。

13年間継続した「土壁による修景プロジェクト」は目に見える変化として商店街のコミュニティー空間に働きかけるものであるが、2012年度には夏から秋にかけて蕎麦の種を植えて育てる風景を商店街に作った。これも修景プロジェクトの一環として街の通り沿いに種から育てる過程に関わった人たちが、その思いを共有し街並みを形成する一部となったものである。まだ見えない形に対して、未来を語りながら、お互いに持っている能力や技術を提供し合いつつ街並みを美しくしたいという思いから汗を流した行為といえる。

継続するプロジェクト型のアートは、最初に青写真はあっても、その場その場で様々な人たちとの対話（インタラクティブな関係）型の作品となっていることで、必然的に開かれた作品となる。そして、相互理解やアートの理解が生まれる優れた手段であると考えられる。絵画や彫刻といった物質的な要素が優先する作品ではなく、プロセスや鑑賞者とのコミュニケーションが重要な要素である。また社会の諸問題にアプローチする作品作りとしても近年様々な場所で行われている手法でもある。

私がこの手法で取り組むもう一つの理由は、美術作品は外部の他者との関係を抜きにした存在としてあるものではなく、必ずその背景に「今という時間」や「現代という時代」また「この場所という空間」にきちんと向き合うことなくして作品の存在価値はないと考えるからである。このアートプロジェクトは13年経過したが、「人とモノ」から「人と人」への関係性を重視する傾向が必然的に出てきており、今後どのように変化していくのかまだ見えない部分がある。しかし、都市型の美術の動向から田舎や自然を背景とした美術活動が、現代という時代の中で確実に求められていることを感じている。そしてそこには明らかに現代への不安に対する解答の一つとして、このプロジェクトが未来に伝えていく人間社会をつなぐひとつの試みでありたいと思う。



松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト実施状況図
2000～2012年

4 おわりに

このプロジェクトが、松代商店街を中心に2000年から始められて13年が経過した。温故知新（故きを温（たず）ねて新しきを知る）、冷たいものをあたため直し味わうという意味でもあるこの言葉の理念のもとで、「修景プロジェクト」という協働作業は進められてきたように思われる。この間、特に2012年においては、瀬沼伸彦さん（日の出そば）、小堺真吾さん（コサカイ住建）、関谷こずえさん、松代保育園の保育士の方々、竹村園長先生、保育園年長組23組の保護者と園児のみなさん、関谷松雄さん、本山ご夫妻、富澤恵子先生（津南町教育委員会嘱託指導主事）、鈴木益蔵さん（郷土史家）、高橋嵩一さん、関谷正義さん、松山欽一さん、（以上松代在住）、新潟県立魚沼テクノスクールの生徒たち、高野雅一先生、種村先生（共に新潟県立魚沼テクノスクール教官）、メディエーター講座の9人の受講生の方々、村木ゼミの学生（森さん、須貝さん、田畑さん、平澤君、吉村さん、成田さん、渡邊さん）、小泉元宏先生（鳥取大学）、後藤哲男先生（長岡造形大学）、NPO法人越後妻有里山協働機構の高橋寛さん、代表関口正洋さん、そして総合プロデューサーの北川フラムさんなど、ここに掲載しきれない多くの人たちと対話を行い、多くの人たちからこの活動を支えていただいた。ここに改めて深い感謝の意を表わすものである。

参考・引用文献

- 1) 先端芸術宣言！ 東京藝術大学先端芸術表現科編 岩波書店 P9～10、P56、P108
- 2) 逝きし世の面影 渡辺京二著 平凡社ライブラリー P388～390、P402～403、p411
- 3) 造形ワークショップの広がり 高橋陽一編 武蔵野美術大学出版局 P188